Letters from California by Masayo Duus

かりふぉるにあ通信

ドウス昌代

文藝春秋

Letters from California by Masayo Duus

かりふぉるにあ通信

ドウス昌代

文藝春秋

かりふぉるにあ通信

1982年6月30日　第1刷

定価 850 円

著　者　ドウス昌代

発行者　半藤一利

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　電話（265）1211(代)

印刷所　共同印刷

製本所　矢嶋製本

©Masayo Duus　1982 Printed in Japan

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

かりふぉるにあ通信／目次

サンフランシスコの道産子会　7
わが家のエネルギー問題　19
日本から来た元旦の珍客　31
アメリカ高校入学　43
さよなら、アンクル・ウォルター　55
自転車チューブとナショナリズム　65
銃の影におびえるアメリカ　77
日米「校内暴力」考　87
死すとも死なず「DONATION」　99
お墓には入れないでね　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ゴールデン・ゲイトは自殺の名所　121
当世アメリカ高校生気質　131
「わたしのお腹貸します」　143
離婚はDO　IT　YOURSELF
地中海ミバエ絶滅作戦　165
「ジャンク・メール」の活用法　177
ハリス夫人の犯罪　187
「移民の国」の理想と現実　199
あとがき　211

装幀　坂田政則

かりふぉるにあ通信

サンフランシスコの道産子会

のっけから日本語で電話がかかって来た。

こんな時、自分がアメリカにいるのか日本にいるのか一瞬分からなくなる。若い男性の快活な声は親しみをこめていった。

「北海道出身と聞いたものですから……。日曜日に道産子会のピクニックがあります。いらっしゃいませんか」

ここサンフランシスコ近郊にも何十人かの道産子がいるとのこと。時々集まって行事をするそうだ。

今やアメリカの日系人はアメリカ生まれの二世、三世の時代である。それでも県人会が結構盛んである。中でも、かつて多くの移民を送り込んだ広島、山口、和歌山などの県人会がいまだに強い。これらの諸県からアメリカへ移民が入ったと同じ頃、北海道にも人が

入り始めている。アメリカか朝鮮か、それとも日本領地とはっきりしている北海道にするか、と迷った一旗組がいたのではないだろうか。

誘いのあった道産子会は、日本からの学生、商社マンの他に、こちらで仕事している技術者とか、日本料理店をやっている人など日本人が大半らしい。アメリカ永住を決意してこちらの市民権を取っている人も幾人かいると聞く。やはり一世の県人会みたいな気もしてくる。

あいにくと先約のある日曜日だった。「残念ながら……」と断った。正直のところ断って、ホッとした。

同郷といっても、北海道は広いのである。地図を広げて私が読める土地名は大きな町がやっとのことである。知っている土地となると正に点でしかない。それも高校を出た時点で終わったも同然なのだ。知っているのは二十年ほど前の古い点となる。

恥ずかしいほど北海道に関する知識が限られていて、それがなにやら面映ゆい。そのうえ、私は同窓同期会も含めて、こういう種の「過去」が大きな顔をしているような会は、お尻のあたりがムズムズしてくる白け性ときている。懐かしいとかセンチとかの情緒をぐっと横へ押しのけちゃいたい可愛げの足りない方である。

私の父は富山から北海道へ渡った人だ。かつて盛んだった県人会に熱心であった。私に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はそれをフンとばかりに馬鹿にしてきた少女時代の記憶がある。自分がそれと同じような同郷会へ出席するとなると、かつてフンとやったその鼻のあたりがどうもピクつくということもある。

私は北海道の岩見沢市で生まれた。札幌から汽車で更に一時間ほど北へ下った町である。早稲田大学へ入るまでここで育った。病気の繰り返しだった。懐かしいなんて余裕でいまだに振り返れない町である。

北海道で育った間、私はいつも自分が北海道という小さな部屋に閉じ込められている錯覚にとらわれていたものである。その飾り気のない部屋の天井は限りなく高く、暗い。やはり見上げるほどの高さに小さな窓がついている。そこから世界を覗き見出来るはずなのだ。が、私の背丈では窓わくに手を伸ばすこともままならない。

窓から羽ばたき出て、世界（ワールド）を自分の目と耳で確かめつかみとりたい。その第一歩が大学教育であり、東京だ。これが胸に秘した、断固たる長い間の夢だったような気がする。

北海道と聞くと、今もあの窓が網膜にはっきり蘇ってくるほどだ。本当にそういう窓の夢をかつて見たような、又そうでないような気もする。いずれにせよ、外国で家庭を持って暮らすなどという夢はまったく見ていない。現在の私の人生が相当な行き過ぎであるこ

とは確かだろう。

私が育った当時の北海道は、函館から連絡船に乗って〝内地〟に行くといっていた。中央からほど遠い〝外地〟だった。少なくともそこに住む人にはそういう思いがあったはずだ。たかが二十年ほど前の話である。

その二十年間に飛行機とテレビ文化などにより、北海道と中央の距離は驚くほど縮まっている。道産子の文化文明、いやその物の考え方もそれなりに変わってきたようだ。

私はその変化を毎年の如く見てきた。

そうなのである。私にとって北海道や道産子がちょっとも懐かしくない理由は、特にこ数年、私が毎夏一、二カ月も北海道に戻るからなのである。

帰ると不精して過ごすが、子供の時から行きつけの本屋にだけは毎日となく出掛けて、その年一年分のめぼしい本を漁る。そんな時、履き馴れた母の下駄をつっかけて歩く私と挨拶を交わしても、近所の人は、

「あら、また帰ってるの」

という程度の驚きすら今では示さない。おかげ様で年毎に中年の顔になっていくのも、ギョッとするほどの変化とは受け止められてない。少なくとも、本人はそう思っている。

近所の人々がいつも興奮して迎えてくれるのは私の息子である。

彼はただいま成長盛りの十四歳だ。この数年、顔付きからして戻る毎に変わっている。
「めっきり背が伸びたねえ！」
「スッカリ少年の顔付きになった」
と皆さんは息子の成長ぶりを楽しみ、感心してくれる。
息子の方も、北海道での夏休みを毎年楽しみに待って過ごす。
彼はボストン生まれのアメリカ人である。学者である私の夫の仕事で、日本を含むいろんな地に移り住んできた。小学校を六回も変わったほどだ。その間、彼が間違いなくコンスタントに訪れたのは、北海道の私の実家とアメリカの夫の両親宅である。息子にとって、北海道は日本の家のあるところなのだ。ちょっとした里帰りである。
帰って来たその日から、近所のおばさんの家へ上がりこんでだべっている。おばさんにとって、息子はおむつをしている頃からの、よく知った男の子なのだ。

息子が初めて千歳空港に降りたのは、まだよちよち歩きの一歳半の時である。
そうそう、思い出した。あの夏は大きな地震があった年である。朝の十時頃の大揺れだった。実家にいる甘えで毎夜遅くまで読書にふけり、その朝も私はまだウトウトしていた。パジャマで飛び出す羽目になった。

二階に寝ていたから、左右に大きく揺れる階段を降りるのがままならない。息子の名を呼びながらやっと裏庭に飛び出たら、当時、ころころとしていた息子は物干し竿のそばで大きく目を見開いてしっかりと立っていた。息子に抱きつく形で、私の母が地面に膝を突いていた。

わが息子が金太郎のごとく頼もしく見えた一瞬である。赤い腹掛けを作ってやりたくなったほどだ。

やがてやって来た夫と共に一年半も東京にいた。そのため、息子は三歳までの間に何回となく北海道との間を行き来したことになる。中でも、正月の思い出を彼は今でも懐かしく心に暖めているようだ。

裏庭の雪をこぐようにして数日がかりで一人でかまくらを作った。鼻の先や頬を赤く雪焼けさせながらご機嫌だった。母はその中に莫蓙(ござ)をしいてやった。みかんやあべ川のおやつの差し入れもしてやっていた。

それからまた三年ほど過ぎたお正月に帰った。

父の方が長い間、町の病院に入っていた頃だ。父は母の作った物だけが口に合うというので、母と私がその差し入れのために一日に何べんとなく病院通いをした。幼稚園生になっていた息子は、そのたびにプラスチック製の短いスキーかスケートのような(何という名

称があるのか分からないが）のを履いて、汗をかきながら付いて来た。暖かいカリフォルニアに移ってから息子は特に雪のある北海道の冬が懐かしそうである。

私が好きなのも冬の北海道である。

父母はストーブをたき、更にその上電気ゴタツに入っているほどの寒がり屋だ。

という私も彼らの家では猫みたいに目を細めながら丸くなり、一日中でもコタツの中で本を読んでいる。

雪がサラサラでもボタボタでも、吹雪の如くに激しくても、降り続けてあたり一面をまっ白く塗りつぶす頃、私はガバッとばかりにコタツから出る。頭のてっぺんからつま先までモコモコに武装して、勢いよく雪の中へ出ていく。気がむくままに、町を歩き回る。

雪が降り続き、寒ければ寒いほど良い。いずれも着ぶくれした人々が深々と毛糸の帽子などかぶり、用事をすませるためにだけ黙々と足早に通り過ぎていく。寒さで顔の感覚が鈍くなる。見知った顔に逢っても、簡単な挨拶に口を開けるのもやっとだ。

雑音はすべてインクの吸取紙みたいに、雪が吸い取ってくれる。町の歩道が初めて考える場にさえなる。特に、夕暮れてからの雪の町が好きだ。家や店の明かりが、いとおしく暖かである。そんな時、素直にその町が、故郷と呼べる。

息子が大きくなるにつれて、北海道への里帰りは彼の夏休みと決まってしまった。そして、私は帰るや夏眠する。夏の郷里はあまりにも〝顔の見える町〟となるからだ。

見知った顔のおしゃべりは、小さな町であるほど口さがない。どこに住もうと私はこういうおしゃべりが苦手である。例の本屋へちょっと足を運ぶのも億劫になってしまうことがある。従って、夏は本を抱えて冬眠ならず夏眠となる。

息子はそんな母親には一切気を使わない。夏は夏なりに北海道を楽しんでいる。釣りが大好きな彼には、彼の夏の訪れを待っていてくれる八十数歳になるおじさんがいる。この老いてますます気の若い釣り仲間は私の父の知り合いである。リュックを背負い首に手拭を巻いて二人はしばしば釣りに出掛ける。

前日には、おじさんの知り合いで郊外に豚小屋をもっている人のところへミミズをカン一杯に取りに行くのもここ数年来のお決まりのコースだ。今では息子は、ますます郊外へ大きく伸びている町の地理に私よりずっと詳しい。

朝一番の汽車やバスでおじさんと出掛ける時は、石狩川や幌向(ほろむい)川まで。町の釣り道具屋の若旦那たるお兄さんに連れて行ってもらう時は、その店の屋号が入ったマイクロバスでもっと遠出するようだ。兄さんは、息子が自分で作った年上の友達である。一日に何回となく店へ道具を見に出入りしていて、遂にはその店の奥に坐って店番の手伝いをするほど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.